

17 世紀におけるマンジュ人の語る漢文化

莊 聲

はじめに

ダイチン・グルン (大清國) 二代目ハンであるホンタイジが大臣らに向かって語った言葉が、マンジュ語 (滿洲語) で以下のように記録されている。崇徳元年 (1636) 九月三十日の記事には、

「昔の故事 (ジュレン・julén) の例に、ある人が、鬼が (その人を) 捕まえて食べようとするので格闘しているときに、その人のカサラ (kasar), バサラ (basar) という二匹の犬が主人を助けて格闘し、鬼をかみ殺して主人の命を救った。そして家に歸るときに、二匹の犬は激しい格闘に疲れて家にたどり着けなくなってしまった。主人は『私が先に行って食べるものを持って迎えに来よう』といったが、家に歸って妻子に會って飽食すると苦しんだことを忘れ、犬を迎えに (行くのを) 忘れてしまった。二匹の犬は、『主人が迎えに来ない。私たちが死ぬ程格闘して主人を救ったのに、主人が私たちに忘れて迎えに来ないならば、私たちは主人のもとにどうして歸ることがあろうか』と、そのまま氣が變わって山に入って狼になったという。これには道理がある。おそらく恩を知らず、人の苦勞を忘れるのを諷しているのであるぞ。その話のように、汝ら大臣が先に家に歸って、汝らのために戦死した兵士を忘れて迎えに行かず、彼等が道中で苦しみ、まだ歸れないで苦勞しているのであれば、犬を迎えに行かなかった者と何ら異なるところがあろうか』と言った¹⁾。

とあり、ホンタイジがカサラ (kasar), バサラ (basar) という名前の犬を主人公とした故事 (ジュレン) を例に出し、戦死した兵士を連れ歸らなければならない、と大臣らに向かって語っていたことがわかる。また、カサラ (kasar) とバサラ (basar) は、モンゴルを含むマンジュ周邊において犬の名前としてよく使われていたこともうかがえる²⁾。こう

1) 『滿文原檔』第十冊、宇字檔、崇徳元年九月三十日、第 465-466 頁 (『滿文老檔』Ⅶ太宗 4、第 1297 頁)。

2) 『蒙古秘史』詞彙選釋』に、「[合撒兒] qasar [狗名]、蒙古語、一切猛獸之概稱。內蒙古民

した故事は、ホンタイジが教訓としていることから、十分に長年に亘って口承により伝えられていたものと考えられる。ただし、ダイチン・グルン初期の『滿文原檔』などの文獻において、ジュレンのかたちで今に傳わるものは、この事例が唯一である。

すでに岡田英弘(1994)は、ホンタイジが、モンゴルの格言集にあらわれたチンギス・カンの次男チャガタイとオチル・セチェンの問答の原典や、モンゴル文學のチンギス・ハン叙事詩中の登場人物であるチョーメルゲンの故事を引用して語っていたことから、マンジュ文化の中にモンゴルの要素があることを指摘している³⁾。また、李勤璞はホンタイジがチベット文學作品の嘉言を教誡として用いたことは、モンゴルのチベット要素であると指摘している⁴⁾。

ダイチン・グルン初期において、大明の制度、政策の導入に擔い手となったのは、大明からやってきた漢人、漢化ジュシェン人(女真)或いはマンジュ人の知識人であった。筆者は、こうした大明的な要素を受容しながら、新しい文化の誕生しつつあることを明らかにした⁵⁾。つまり、ダイチン・グルン初期においては、多元的な文化社會となっていたと考えられる。本稿では、漢籍の扱われ方に注目し、その一端に考察を加える。

ダイチン・グルン初期において、太祖のヌルハチと太宗のホンタイジは好んで『三國演義』を読んできたことが重視され研究がなされてきた⁶⁾。しかし、マンジュ語を母語とするヌルハチやホンタイジが漢籍中の故事をいかにして知り得たのか、ということについてはほとんど検討されていない。したがって本稿では、はじめに、こうした問題意識をもってマンジュ人の漢籍受容の實態を明らかにする。さらに、漢籍から得た知識がいかに活用されていたのかを示し、最後に書物編纂に関わる問題を取り上げて検討する。

なお本稿においては、マンジュ語のローマ字轉寫には、P. G. von Möllendorff, *A Manchu Grammar*, Shanghai, 1892の方式を用いる。引用文については、[+]は原文書で加筆されている部分を示し、[#]は原文書で削除されている部分を示す。[□]は原

↙
間神話故事，鳳凰下了兩箇鐵蛋，孵出哈薩爾和巴薩爾兩只狗。薩滿祭詞里有 hasar, basar 兩只天狗」(第 173 頁)。また、B. B. Радлов. 1905. pp. 1528. によると басар (basar) は犬の名前でよく使うようである。ほかにも、小澤重男(1985)は「合撒兒」qasar「狗名」、モンゴルの何人かの友人から「モンゴル人は自分の犬に好んで xasar とか basar の名をつける」という話を聞いたことがある(『元朝秘史全釋』中、第 86 頁)。また、『『蒙古秘史』校勘本』卷二、第 93 頁参照。

3) 岡田英弘(1994)、第 19-33 頁。

4) 李勤璞(2003)、第 279-304 頁。

5) 莊聲(2013)、第 57-75 頁。

6) 稻葉岩吉(1914)、第 121 頁。蕭一山(1927)、第 220 頁。李光濤(1947)、第 251 頁。陳捷先(1995)、第 8 頁。

文書の缺落部分を示す（漢文文書も同様）。[/] は改行，[//] は改頁を示す。また、『滿文原檔』については、東洋文庫譯注『滿文老檔』を参照し、筆者による日本語譯を用いた。ほかのマンジュ語文書についてもすべて拙譯による。

1 讀書のしかた

『滿文原檔』によると、ヌルハチは「昔の佛説あるいは佛典」という物語を教訓として語る場面がしばしば窺えるが、しかしながら、當時佛教に關する書籍が流行していたことがわかる。だが、ヌルハチの語る物語には、佛典だけにとどまらず、さらに幅廣い知識を織り交ぜた思想があらわれている。たとえば、『*taidzu horonggo enduringge hüwang-di yargiyan kooli*』（『太祖武皇帝實錄』マンジュ語）には、

二十四日に、ゲンゲエン・ハンが全てのペイレに教えて言うには「むかし我々のニングタイ=ペイセ、ドンゴ、ワンギヤ、ハダ、イエヘ、ウラ、ホイファ、モンゴル國はみんな金銭に執着して、忠誠心が低く、邪貪を上となし、兄弟は互いに財産の奪い合いをして殺害した。私が教えるだけではなく、汝らは目や耳のない者なのか」という。（中略）昔の衛鞅（wei yang）という人が言うには「輕薄の言葉は美しい、至言は事實である。苦き言葉は藥であり、甘き言葉は病む」という。また、『忠經・junggin』には「事態が始まる前に諫めれば何より上であり、事態が終わった後に諫めれば何より下であり、見て諫めなければ正直な人ではない」といっていた。（中略）昔の宋國（sung gurun）の劉裕（lio ioi）ハンが全ての大臣らに向かって「むかしの世代の聖ハン、賢大臣などはみんな貧しく、苦しんで生きて、そして後に出世した。舜ハンは自ら畑をしていたという、傅説（fu iowai）は關を築いたという、百里奚（belisi）は牛を見張っていたという、膠鬲（jioo guo）は鹽を煮て魚を探していた」という、天、それは何だろう。そうして全ての大臣は「ハン、大臣らに委ねることは大きい。天は大きいことに委ねようとして生まれ、ハン、大臣なるものを先にその心を苦しませて、あらゆることを考えさせて、安心させない。筋骨を苦しませて身の暇を出させない。腹を減らしても食物を食べられない、故に貧しさと苦しきなどあらゆる苦しみに耐えさせて、慈しむ禮をする者が道義である。賢人の心を得られて、そのような人がハンになった後に、國民のことが分かる。そのような人が大臣になった後に、民の苦しみが分かる。天が考えたのはそれだ」と答えたという⁷⁾。

7) 『*taidzu horonggo enduringge hüwangdi yargiyan kooli*』（『太祖武皇帝實錄』）（臺北國家圖書館殘卷藏）卷四，天命十一年六月二十四日。また、『*daicing gurun i taidzu horonggo endur-*

とある。ここで何よりも注意すべきなのは、ハンたるヌルハチは全てのベイレたち（貝勒）を集め、『史記』に出てくる衛鞅の言葉や、後漢の儒學者である馬融が著した『忠經』⁸⁾や、さらに、南朝の宋の初代皇帝である劉裕⁹⁾が語った言葉を用いて、彼らに語っていることである。衛鞅や劉裕に関する記事は、もちろん、いずれも漢籍にしか出てこないものである。馬融の『忠經』も同様であるが、書名の通り主君に仕える忠孝の道、忠道を概説した經典である。ヌルハチが語る内容は「忠諫章第十五」に相当し、忠臣が最も心掛けるべき職能は「諫諍」であるとする部分に對應すると考えられる¹⁰⁾。ヌルハチは佛典以外に漢籍の記事を用いて、マンジュ語で語っていることには着目すべきである。さらにヌルハチが語る内容はこれだけにとどまらず、昔の金國に関する史實も引用している。

また上に挙げた旨には、次のような故事が続く。

（前略）むかし金國の大定ハンは、汴京城に居てむかし暮らしていた白山の東會寧府の故地を見に行こうとし、息子の太子に向けて「汝は憂えるな、人々を譽めさせて信頼をとる。怖がらせて（太子の）權威を示せ。商人を育て金錢を集める。農夫を育て食糧を集める」といったという。（後略）。

大定は金國の四代目ハンの年號である。ここで引用した事例は『金史』の大定二十四年（1184）三月の條で確かめられるが、その内容は完全に合致するわけではない¹¹⁾。

ingge hūwangdi i yargiyan kooli]（『大清國太祖武皇帝實錄』）卷四、天命十一年六月二十四日（『東方學紀要』2、第270-272頁、影印本が収録）。また、『太祖武皇帝實錄』（卷四）に、「二十四日。帝訓諸王曰、昔我祖六人及東郭、王佳、哈達、夜黑、兀喇、輝發、蒙古俱貪財貨、尙私曲。不尙公直、昆弟中自相爭奪殺害、乃至於敗亡。不待我言、汝等豈無耳目亦嘗見聞之矣。（中略）。昔衛鞅云、貌言華也、至言實也、苦言藥也、甘言疾也。又忠經云、諫于未形者上也、諫于既形者下也。違而不諫、則非忠臣。凡事、勿謂小而無害、不知由小及大、有害于國者多也。凡我訓言、莫非成就汝等、豈貽累于汝等耶。昔宋劉裕、謂群臣曰、自古明君賢相、皆由困而亨。舜發叀畝、傅說舉版築、膠鬲舉魚鹽、百里奚食牛、天意何居。群臣對曰、君相之任、大任也。故天將降大任于是人、必先苦心志、使之遍慮事物、而內不得安。勞勩骨、使外不得逸。餓體膚、使食不得充。所以動心忍性、增益其所不能。是人而爲君、必能達國事。是人而爲相、必能悉民隱。天意如此而已。（中略）。昔定帝、自汴京幸故都會寧府在白山之東。謂太子曰、汝勿憂也。國家當以賞示信、以罰示威。商賈積貨、農夫積粟。（後略）」とある。また、『清太祖武皇帝努兒哈奇實錄』（卷四、第十一頁）にも収録したが、「有害于國者多也」は「有壞于國者多也」となっているだけであり、それ以外はほとんど一緒である。『太祖武皇帝實錄』の研究については、今西春秋（1967、1974）参照。

8) 『宋史』卷二百五、藝文志第一五八、藝文四、馬融『忠經』一卷。

9) 『宋書』卷一、「本紀」第一、「武帝」上、「高祖武皇帝諱裕、字德輿、小名寄奴、彭城縣綏輿里人、漢高帝弟楚元王交之後也。（後略）。」

10) 『忠經』「忠諫章第十五」、「忠臣之事君也、莫先于諫。下能言之、上能聽之、則正道光矣。諫于未形者上也、諫于已彰者次也、諫于既行者下也。違而不諫、則非忠臣。夫諫始于順辭、中于抗議、終于死節、以成君休、以寧社稷。書云、木從繩則正、后從諫則聖。」

11) 『金史』卷八、「本紀第八」「世宗下」二十四年三月庚寅朔、「萬春節、宋、夏遣使來賀。甲ノ

金國のハンに關わる事例を用いて語る例は天命三年まで遡ることができる。天命三年(1618)四月の條によると、

翌十四日の巳の刻に雨が降った。二道に別れて行った八旗の兵は、その日それぞれ進む方に向いて八列に別れて進んだ。ハン自身はワフン・オモの野原に泊まった。その晩ハンはモンゴル國のバイレエンゲデレ、サハルチャ國の大臣サハリヤンという名前の婿に向かつて、昔の金のハンの暮らしの事例を告げて、そして言うには「古來のハン・バイセの事例を見れば、自ら苦勞し戦い合ったが、いずれも永遠にハンであったものはない。今私はハンの位を得たい、永遠に生きたいと思ってこの戦いを始めたのではない。ニカン(明)の萬曆ハンが大いに私を恨ませたので、私は耐えられず戦いを始めたのだ」と言ってそこで泊まった¹²⁾。

とあり、ここでヌルハチが切實な關心をもって、行軍の途中に皆が寄り集まっているところで、金國ハンやバイセの事績について言及している。さらに天命六年(1621)四月の條には、

ハンの書を都堂アデン、副將李永芳、馬友明、漢人の遊撃たちに下した。「ニカンの人々の暮らしを記録した様々な事例(kooli)や法例(šajin)をすべて書に書いて上奏せよ。(私たちに)不適切なところを棄て、適するところを聞きたい。よその國の人の事は知らない、といっても、偽って告げるな。遼東のところの兵數はいくつ、城堡の數はいくつ、百姓の數はいくつ、木匠、畫匠いろいろの匠人を全て書に書いて上奏せよ¹³⁾。

とある。ヌルハチは金國の事例を語る一方で、さらにニカン(漢)の事例(kooli)や法例(šajin)を適用する際には、自分達に適さない部分を棄てて、適するところを「聞きたい」と強く要求し、金國以外の事例にも關心を寄せさまざまな事例の抜粹をするように求めた訓令を出していた。マンジュ語文獻には、ヌルハチは自らが「聞くところによれば(donjici)」によって得た漢籍の故事が斷片的に記録されている。

① 私¹⁾の聞くところによれば(donjici)、周の武王は彼の大臣箕子を朝鮮國の初代の王に封じたという¹⁴⁾。

午、以上將如上京、尙書省奏定皇太子守國諸儀。丙申、尙書省進皇太子守國寶、上召皇太子授之、且諭之曰、上京祖宗興王之地、欲與諸王一到、或留三二年、以汝守國、譬之農家種田、商人營財、但能不墜父業、即爲克家子、況社稷任重、尤宜畏慎。」

12) 『滿文原檔』第一冊、荒字檔、天命三年四月、第82頁(『滿文老檔』I太祖1、第89-90頁)。

13) 『滿文原檔』第二冊、張字檔、天命六年四月、第72頁(『滿文老檔』I太祖1、第305頁)。

14) 『滿文原檔』第二冊、張字檔、天命六年七月八日、第143-144頁(『滿文老檔』I太祖1、第352頁)。

② 昔の例を聞くところによれば (donjici), 福に頼った者は榮え, 力に頼った者は衰えている¹⁵⁾。

③ 私の聞くところによれば (donjici), 汝のニカンの劉邦 (liobang) は淮水のちかくで人夫を監督していたが, それをまた天が愛しんだので, 漢の王ハン (han wang han) となって暮らした。趙太祖 (jao taidzu) は町で無頼にたよって暮らしていたが, 天がまたこれをも愛しんだので, ハンとなって何代も國の主となって暮らした。朱元龍 (jū iowanlong) は自分の父母を亡くし獨りで乞食をしていて, 郭元帥の下に使われて暮らしていたが, これを天が愛しんだので皇帝となって, 十三, 四世を経ている¹⁶⁾。上述のように, いずれも漢籍の記事や事例を引用する際に, ヌルハチは自らが「聞くところによれば (donjici)」こととして語っていることは着目すべき点である。このことから, ヌルハチは得られた故事を讀んだのではなく, 聞いて覺えたと考えられる。

ここで注意すべき点は, 上記の③の朱元龍 (jū iowanlong) は『滿文原檔』に綴られた名前であるが, 乾隆年間にあらたに有圈點マンジュ文字で書き寫された『滿文老檔』では, 朱元璋 (ju yuwan jang) と改められている。朱元璋はもちろん大明の太祖であり, これについては, 既に Tatiana A. Pang & Giovanni Stary (2000) の研究が『英烈傳』¹⁷⁾ に由来した名であることを指摘している¹⁸⁾。『英烈傳』は, 郭勳が編纂したもので, その内容は元末明初の群雄時代を取り扱った通俗小説であり, おもに太祖朱元璋を主人公として, 庶民向けの講談や雜劇でよく扱われ, 「章回小説」と稱する白話形式のものである。『英烈傳』の中では朱元璋を「朱元龍」としており, この影響を受けてダイチン・グルン初期のマンジュ語史料は, 朱元璋を「jū iowanlong (朱元龍)」という名前で記していたのである。この事例からも當時のマンジュ人社會においては『英烈傳』のような歴史小説の影響があったと推測される。

ちなみに, ヌルハチの身邊で讀み聞かせを行う人物が現れることについては, 天命十年 (1625) 六月に記録されている。

十□□にトゥシャが漢文を學んで, ハンが用いて事例 (kooli) を告げさせ (alabume),

15) 『滿文原檔』第三冊, 列字檔, 天命八年正月二七日, 第196頁 (『滿文老檔』II太祖2, 第641頁)。これは『史記』にある文句であり「恃德者昌, 恃力者亡」という。

16) 『滿文原檔』第五冊, 宙字檔, 天命八年五月, 第5頁 (『滿文老檔』II太祖2, 第760頁)。

17) 『英烈傳』第五回, 「衆牧童成群聚會」, 「朱公將孩子送到皇覺寺中佛前悔悔, 保佑易長易大。因取個佛名叫做朱元龍, 字廷瑞。四歲五歲, 也時常到寺中頑耍。(後略)。」『英烈傳』の研究については, 大塚秀高 (1994) 參照。

18) 龐曉梅, 斯達理 (2000) 「最重要科學發見之一, 老滿文寫的『後金檄明萬曆皇帝文』」第186-191頁。

ハンの家に泊まっていたが、ハンの子の乳母に通じたので殺した¹⁹⁾。

このように、ヌルハチの身邊に漢文を學んだジュシェン人（女真人、のちの滿洲人）が家庭教師として務めていたことが確かめられる。また、ヌルハチやその家族にさまざまな書物の事例（kooli）を教え、アイシン・グルン時代から、このような知識人が學問の傳授に大いに役割を果たしていたと考えられるのである。

こうしたことで、ホンタイジの時代にも同様に、金國ハンの故事を讀み續けていたことが分かる。たとえば崇徳元年（1636）十一月十三日の條に、

十三日、聖ハンはそれぞれ新王、郡王、ベイレ（貝勒）等、旗主等、都察院の官人等を集めて、鳳凰樓の下に坐って、弘文院の筆帖式等をして金國の第五代の世宗ウル=ハンの事例を讀み上げさせる時、聖ハンは諸人に向って、「この書を汝ら集まった諸人はよく聞け。この世宗ハンなる者は、ニカンの人、モンゴルの人いずれの國でも名聲のある優れたハンである。そうして後世の賢者等は小堯舜ハンと稱賛し語っている。私はこの書を翻譯させマンジュ語で書いて讀んで以來、馬が獸を見た時に、馳せようとして耳がぴくぴくするように、私が耳目は明快となり、この上なく感歎する²⁰⁾。

とある。國號をダイチン・グルンとし、年號を天聰から崇徳と改元した直後に讀書を擔當した弘文院の筆帖式らに、マンジュ語譯にした金國の第五代世宗ウル=ハンの事例を讀ませていたことがわかる。

このウル=ハンを「小堯舜」と稱していたことは、つとにヌルハチ時代から知られている。たとえば、『北京圖書館善本書目』にある「後金徽明萬曆皇帝文」²¹⁾に窺える内容によると、

【漢文】又觀我國史書，世宗皇帝最爲文明之主，明達政事，好賢納諫，天下太平，家給人足，倉廩有餘，□□□號爲小堯舜。善政懿行，上格皇天，下服臣庶，是以得爲皇帝，揚名于千萬世之後，此其十一也。

19) 『滿文原檔』第四冊，收字檔，天命十年六月，第294頁（『滿文老檔』Ⅲ太祖3，第976頁）。

20) 『滿文原檔』第十冊，字字檔，崇徳元年十一月十三日，第647-648頁（『滿文老檔』Ⅶ太宗4，第1438-1439頁）。

21) 『北京圖書館善本書目』卷二，「目二」「史部上，雜史類」，第32頁。また，テキストは『清入關前史料選輯』（一），第289-296頁に収録され，この漢文テキストの研究については，今西春秋（1973a，第137-147頁，1973b，第27-37頁）参照。一方，喬治忠（1992，第106-110頁）も研究をしたが，詳細な検討が加えられるとは言えない。また，Tatiana A. Pang, Giovanni Stary（1998, pp. 263-340）によってマンジュ語のテキストが発見され，斯達里（2003第702-708頁），龐曉梅（2003第709-714頁），Tatiana A. Pang, Giovanni Stary（2010）などの研究がなされた。

【マンジュ語】また、私の事例を見るところによれば、金國のアグダ（阿骨達）=ハンの五世のウルはハンになったあとに、ダイデン=ハンと（大定）稱していた。ダイデン=ハンはおよそのハンより明君であり、賢人を遣って諫言を受け入れる。天下が太平になって、國は富み民は豊かに暮らしていた。□□□□□□□□。従ってダイデン=ハンを小堯舜と稱した。忠義を天が讃えて、みんなに擢用させてハンになって、代々に忘れず稱する事例これは十一條である²²⁾。

とある。漢文と滿文の下線部分の、「□□」は缺落したものである。あいにく漢文と滿文は全く同じところが缺落しているので、復元のは困難であったが、漢文『金史』卷八、「本紀」によって缺落した部分が確認できる。ここでは、ここで漢文の「觀」はマンジュ語で「見るところによれば (tuwaci)」と對譯されており、また「我國史書」とはもちろんヌルハチがたてた「aisin gurun」（金國）の史書ではなく、12世紀に同じ女真人がたてた金國の史書『金史』をさしているには間違いない。要するに、ヌルハチは『金史』の故事を「讀む」ことによって知り得たことを表している。こうして「後金徽明萬曆皇帝文」に『金史』の故事を「tuwaci」と7條に分けて取り入れていたのである。

さらに「後金徽明萬曆皇帝文」では五帝の舜帝から、周の宣王、始皇帝、前漢の劉邦、三國の曹操、孫權、宋の徽宗、欽宗、元の順帝および朱元龍（朱元璋）を含む中國歴代の興亡の歴史を載せており、それらに關する故事を8條に分けて「聞るところによれば (donjici)」という表現によって記している。これらの記述から、明らかにマンジュ人は「donjici」と「見るところによれば (tuwaci)」という二つの方法によって「讀書」を行っていたということが言える。要するに、「tuwaci」はマンジュ語譯された書物を讀んで知り得た内容であるのに対し、「donjici」は「講談者」の讀み上げさせることによって知り得た内容であると考えられる。

一方、宋代から「平話」と呼ばれる形式の歴史小説が庶民の間で流行し、明代に至ると、各地で「講史」（評話、説書）という歴史故事を語る習慣が盛んになった。こうした時代の中で、マンジュ人もそのような文化背景の影響を受けて「donjici」によって故事を傳えていた可能性が高い。

22) Tatiana A. Pang, Giovanni Stary (1998). pp.311-312. 【原文轉寫】「○ geli mini kooli be tuwaci aisin gurun i aguda/han i sunjaci jalan i ulu han tehe manggi: /daiding han seme gebulehebi: daiding han aisin i/yaya han ci genggiyen bihebi: sain niyalma be baitalame/tafulara gisun be gaime: abkai fejergi taifin//ofi: gürun bayan irgen elgiyen banjihafi: //□□□□□□□□/ tuttu ofi daiding han be ajige/yoo siyun sehebi: tondo sain be abka saišafi/geren tükiyefi han ofi jalan halame onggorako/maktara kooli ere juwan namu:」

それを踏まえて「後金檄明萬曆皇帝文」の内容に戻ると、正史には載っていないエピソードが多く収載されている。しかも、それらは白話の文體で記され、周の宣王、始皇帝、大宋の徽宗と欽宗などの故事がわかりやすく語られている。そこで、「後金檄明萬曆皇帝文」で使用されたエピソードを、宋から明にかけて講談者が用いたテキストである『春秋列國志傳』と『大宋宣和遺事』²³⁾の内容と比べてみよう。

『春秋列國志傳』は、周代武王から春秋五霸、戦國七雄までの故事を扱った白話文の故事であり、大明の余劭魚と馮夢龍による二つのバージョンが編纂され、二種の内容には

表一

「後金檄明萬曆皇帝文」マンジュ語	「後金檄明萬曆皇帝文」漢文	『春秋列國志傳』
<p>また聞くところによると、「周國の宣王ハンの時に、</p> <p>ハンの都で子供、大人が共に晝夜に拍手しながら</p> <p>「月が只今消える「mükumbi」、日が只今沈む「tühembi」、人間がモウジ草で、周國を壊す」と歌っていた。</p> <p>そのように歌ったことを、城を巡廻する兵士が聞いて、書を書いてハンに報告したことで、</p> <p>ハンは驚いて「これはどういうことですか」と問うと、召穆という大臣が「人間が木で弓を造り、ジ草で箭桶を造る。愚見は國にはこれから弓矢の災害がある」と言った。</p> <p>ハンが「そうすると城内の弓矢を造る人を殺せ、全て倉庫にある弓矢を焼いたら如何でしょうか」と言うと、伯陽父という大臣が「私が空のようすを見ると、その兆候はハンの宮殿にあり、弓矢のことではない。</p> <p>後世に必ず女王があらわれて國を終わらせる。</p> <p>それでまた月は只今消える、日は只今沈むと言って、</p>	<p>又聞[周]宣王時、</p> <p>市中有民謠云：</p> <p>月將升，日將沒，槩弧箕服，實亡周國。</p> <p>宣王聞之大驚，問曰：此謠主何吉凶，大臣召穆奏曰：“槩弧箕服，主國有弓矢之禍。”</p> <p>宣王曰：盡殺造弓矢之人，燒藏弓矢之庫，何如。</p> <p>太史令伯陽父曰：“臣觀天象，禍在宮中，非幹弓矢之事。</p> <p>況謠云，月將升，日將沒，</p>	<p>時京城兒童不拘長幼，至晚皆拍手，傳謠謠言歌數句于市上。其謠言歌曰：月將升，日將沒，槩弧箕服，實亡周國。</p> <p>五城兵馬司巡綽皇城聞其歌錄奏于天子。宣王出朝治政，近臣奏：畿內兒童誦謠言四句，鼓舞於六街三市之中，兵馬司錄其歌以聞。王覽其歌曰：槩弧箕服，實亡周國。</p> <p>王大驚，問群臣曰：此事主何吉凶？左宗伯召穆奏曰：槩是山桑木名，可以爲弓。箕草名，可結之以爲箭袋。據臣愚見，國家後有弓箭之禍。</p> <p>王曰：若此，盡誅京師作弓箭之人，盡燒庫內弧矢，何如？</p> <p>太史令伯陽父奏曰：臣觀天象，其兆落在陛下宮中，非干弓箭之事。</p> <p>必主後世有女主亂國之禍。</p> <p>況謠言曰：月將升，日將沒，</p>

23) 『七修類稿』卷四十六「事物類」「徽欽被擄略」には、「宋徽、欽北擄事迹、刊本則有『宣和遺事』、抄本則有『竊憤錄』、二書較之、大事皆同。惟虜人侮慢之辭、醜汚之事、則『竊憤』有之也。至于彼地之險、彼國之事、風俗之異、時序之乖、則『宣和』較錄爲少矣。二書皆無著書人名、且遺事雖以宣和爲名、而上集乃北宋之事、下集則被擄之事、首起如小說、院本之流、是蓋當時之人著者也」とある。また、神谷衡平(1958、第361頁)は、「『大宋宣和遺事』は宋代の作で、中國における口語文小説の最も古いものの一つであるといわれ、北宋末期の史實に小説的の説話を織混ぜた興味ある讀物であるが、その作者の誰であるかは不明である」と述べている。

<p>日というのはハンの如く、沈むというのはいくはない。月というのは女の如く、消えるというのは女王があらわれて禮儀を終わらせるということでしょう。</p> <p>ハンが罪のない庶民を殺す、兵士の武器を焼けばいいのか」と勧めてやめられた²⁴⁾。</p>	<p>日者人君之□，沒者不祥之兆，月者後妃之□，□者當有女主以亂天下。</p> <p>□□□殺無罪之人，燒弓矢之□</p>	<p>日者人君之象將，沒不詳。月者太陰之象，言昇女主得政亂國明矣。</p> <p>陛下豈可妄殺無辜之民，而焚軍旅之器哉²⁵⁾。</p>
--	---	--

やや異なる箇所が見られる²⁶⁾。「後金檄明萬曆皇帝文」のマンジュ語譯の底本は余劭魚テキストの「姜皇后脫簪諫王」と「盧妃懷孕十八年」であることが分かる。

まず、「表一」のマンジュ語を余劭魚のテキストと比較すると、漢文をどのようにマンジュ人が理解して譯したのか、解釋に困る箇所がある。たとえば、「月將升，日將沒」の「升」と「沒」は、マンジュ語でそれぞれ「mükumbi」（消える）と「tühembi」（沈む）と譯されているが、「升」は「昇る」という意味ではなく、「mükumbi」（消える）と譯され、「沒」は「沒^{mei}」（ない）ではなく「沒^{mo}」（沈む）とそのままの意味で理解して譯されている。

また、「槩弧箕服」は、「人間がモウジ草」と譯すのものだけではなく、「人間が木で弓を造り、ジ草で箭桶を造る」とも譯されている。ここから、「箕」を「モウジ」草と意譯する一方で、「ジ」草と音譯もしていることがわかる。『國語』韋昭解では「山桑曰槩。弧弓也。箕木名。服矢房也²⁷⁾」のように、「箕」は「木名」だと解釋する古注釋があ

24) Tatiana A. Pang, Giovanni Stary (1998). pp. 277-280. 【原文轉寫】「○ jai geli donjici : jeo gurun i hiwan wang/han i fonde, han i hecen i buya jüse, amba/asika gemu siyun yamjime falanggo tüme ücileme/biya teni mükumbi, siyun teni tühembi, niyalma/moo ji orho, jeo gurun be efulembi, tutu ücurebe hecen heterere coohai/niyalma donjifi bithe arafi han de alara//jakade han sesulafi hendume, ere gisun ai/serengge, siomu gebungge amban hendume/niyalma moo be beri arambi, ji orho be/ladu arambi, mini mentuhun i dolo gurun de/amala beri sirdan i jobolon bi sembi, han hendume tutu oci hecen i dorgi beri/sirdan arara niyalma be gemu wara, küi beri//sirdan be gemu tuwa sindara oci antaka//tede beyeng fu gebungge amban hendume bi/abkai arbun be tuwaci, tere ganio han i/kowai dolo bi : beri sirdan i oilen waka/amagan jalan de urunako hehe ejen tücifi/gürun be facuhurambi : tere anggala biya/teni mukumbi : siyun teni tühembi sehefi//siyun serengge han niyalmai arbun : tühembi/serengge sain ako : biya serengge hehe/niyalmai arbun : mukumbi serengge hehe ejen/tücifi doro be facuhurarengge yargiyan/kai : han oile ako irgen be ware : coohai/agura be tuwa sindare oci ombio seme/tafulame nakabuha : 」とある。

25) 『新鑄陳眉公先生批評春秋列國志傳』第一卷「中國歷史小說選集2」ゆまに書房1983年、第170頁。また、余劭魚『春秋列國志傳』上卷二、古本小説集成、上海古籍出版社、第266-267頁。

26) 魯迅「中國小説史略」（註21、第158頁）は、「『東周列國志』二十四卷一〇八回。明余劭魚撰『列國志』、明末馮夢龍改訂爲『新列國志』、清蔡元放刪改爲『東周列國志』、并加評語」と指摘する。

27) 『國語』「鄭語」第十六。

る。マンジュ人が「箕」は草と理解したのは、もちろん原典の召穆の解釋にしたがっていたのであるが、古くは「草」と解釋した字は「箕」ではなく「萁」であり、『漢書』師古注に、「槩弧萁服」「槩，山桑之有點文者也。木弓曰弧。服盛箭者，即今之步叉也。萁草，似荻而細，織之爲服也」²⁸⁾ という解釋もある²⁹⁾。

これらのマンジュ語譯のできばえを見ると概して簡潔に翻譯されており，原典に忠實で嚴密であることよりも，通讀できることを優先させたと考えられる。

一方，漢文「後金徽明萬曆皇帝文」の方は，體裁が整っていない部分が多く見られ，原典の姿を復元しながら，マンジュ語から翻譯されたものではないかと考えられる。

さらに「春秋五霸」，「戰國七雄」の故事だけに止まらず，「後金徽明萬曆皇帝文」では宋代のエピソードも含まれていた。その内容は次の〔表二〕の通りである。

表二

「後金徽明萬曆皇帝文」マンジュ語	「後金徽明萬曆皇帝文」漢文	『大宋宣和遺事』
また聞くところによると，ニカンの宋の徽宗ハンの時に，狐が入って玉座に登って座った。また，一人のリングを賣る男子が妊娠して子供を産んだ。また，酒を賣る朱という女に突然ひげが生えてきた。ひげの長さが十四ウルフン (ürhun) となって，それを徽宗ハンは聞いて女道士とした ³⁰⁾ 。	又聞宋徽宗時，有狐升御坐，男人生子，女人生須，詔爲女道士。	(宣和) 六年十二月。兩京，河，浙路大水。是時災異疊見。 都城有青果男子，有孕而誕子，坐蓐不能收，換易七人，始分娩而逃去；又豐樂樓酒保朱氏子，其妻年四十餘，忽生髭髯，長六，七寸，毓秀甚美，宛然一男子之狀。 京尹以其事聞于朝，詔度朱氏妻爲道士。(中略)。 (宣和) 七年九月，有狐自良嶽山直入中禁，据御榻而坐。(後略) ³¹⁾ 。

28) 『漢書』卷二十七，「五行志第七下之上」。

29) 『說文解字注』一篇下，「艸部」，第四頁，「萁」豆莖也。「當云未而曰豆，從漢時語也，或後人改之。楊惲傳，種一頃豆，落而爲萁。孫子兵法曰，萁秆一石，當吾二十石。曹操注，萁音忌，豆稽也，按萁即其字。潘嶽馬汧督誅曰，萁稈空虛，用萁秆字」とある。また，同書「五篇上」，「竹部」，第二十一頁，「箕」所以簸者也。「所以者三字今補，全書中所以字爲淺人刪者多矣。小雅曰，維南有箕，不可以簸揚。廣韻引世本曰，箕帚，少康作。按簸揚與受室皆用箕」とある。「萁」と「箕」は，それぞれ屬する部首の「艸部」と「竹部」に配列して，實は「竹」は『說文解字』に「冬生艸也」冬にも生きる草だと釋がなされる。

30) Tatiana A. Pang, Giovanni Stary (1998). pp.300-301. 【原文轉寫】「○ jai geli donjici nikan i süng hoisong//han i fonde: dofi dosifi han i basargan/de tafafi tehebi: jai emu tübike uncara/haha niyalma beyede ofi jui banjihabi: jai/nüre uncara jü halangga niyalmai sargan de/gaitai andan de salu banjihabi: salu golmin /juwan duin ürhun bikibi: terebe hoisong/han donjibi hehe doose obuhabi:」とある。

31) 『大宋宣和遺事』「利集」第 82 頁。また，神谷衡平 (1958) 「大宋宣和遺事」(第 293-294 頁)，大塚秀高 (2000, 第 123-155 頁) 參照。

『大宋宣和遺事』については、宣和は北宋徽宗皇帝の年號であり、講談形式で白話小説の文體を用いて書かれたものであり、元代になっての作であるか、あるいは宋人の原作に元人が加筆したものではないかとの説もある小説である³²⁾。いずれにせよ、講談のための材料として作られた講談者の用いた種本「話本」であったものである。

まず、「表二」の『大宋宣和遺事』には宣和六年十二月と宣和七年九月の故事を取り上げている。ところが、ヌルハチがこの内容を取り替えており、しかも、翻譯はかなり略され、宋の徽宗ハンのエピソードを中心として語っているのみである。特に、ひげの長さの比喩は、兩文章では異なっていることがわかる。漢文の「寸」に對して、マンジュ語のほうはウルフン (ürhun) という尺貫法が使っており、半寸の長さにあたる³³⁾。従って、六、七寸を十四ウルフン (ürhun) と譯するのは正確であり、アイシン・グルンには大明と異なる傳統的な尺貫法が用いていたこともわかる。

一方、「後金檄明萬曆皇帝文」の漢文は比較的理解しやすく、しかもマンジュ語の内容と比べてみると簡略にすぎると思われる。要するに、漢文は底本ではなく³⁴⁾、マンジュ語で書き上がった内容をもとに、漢文がつくられたのではないかと考えられる。

要するに、天命年間に頒布した「後金檄明萬曆皇帝文」は、それまでの「史書」の故事や「白話小説」からのエピソードを抜き出してまとめたものであり、しかも、ヌルハチが自らの「tuwaci」のみに基づいて書いたものではなく、「donjici」という講談者を介したものも含んでいた。もはやアイシン・グルンの人々が「白話小説」などの書物に馴染んでいたことに間違いないだろう。また、マンジュ語で記された「小説」からモンゴル語に譯されたものも大いに盛んになったことも知られている³⁵⁾。

2 兵書を讀む

前述したようにヌルハチの時代には「史書」や「白話小説」などにわたる書物を、断片的に譯しながら獨特な讀みかたをしていた。本節では、太宗の時代の兵書の扱いについて取り上げてみよう。例えば崇徳三年（1638）八月の事例に、

32) 魯迅『中國小説史略』（第128頁）、「『大宋宣和遺事』世多以為宋人作，而文中有呂省元『宣和講篇』及南儒『詠史詩』，省元南儒皆元代語，則其書或出于元人，抑宋人舊本，而元時又有增益，皆不可知，口吻有大類宋人者，則以鈔撮舊籍而然，非著者之本語也。」

33) 『清文總彙』卷二 ur，第四十二頁。

34) 龐曉梅（2003），第709頁。「滿，漢文兩個版本雖出自同一時期，但是漢文本早于滿文本，漢文本是滿文本的底本。」

35) 李福清（Борис Львович Рифтин）（1982），第96-120頁。

上諭、姜太公 (jiyang taigung) を引き合いにして教訓している時、グサの長の石廷柱は答えて言う、太公は人をほしいままに殺し生かす。我々は彼のように人をほしいままに殺したり生かしたりするだろうか³⁶⁾。

とある。姜太公 (jiyang taigung) とは、一般的には太公望呂尙という名でも知られる人物である。前十一世紀の半ば、西周の武王に仕えて牧野の戦いで勝利をおさめ、殷・周の王朝交替をもたらしたという。太公望に関しては多くの傳説が生まれて、その故事はいろいろな書物に残された。廣く知られているのはその軍略が傳説化し、太公望を著者として假託した兵法書『六韜』が後に編まれるに至ったことである³⁷⁾。このような姜太公の故事はアイシン・グルンでも扱われ、かつ「生」と「殺」という對となる概念に関連する教誡として用いられた。こうした漢籍の兵法書をマンジュ語に譯しはじめたことに關して、ダハイ (達海) 譯の『六韜』の中に附したダハイに關する文章を見てみよう、

大アイシン・グルン天聰五年 (辛未) 春の初月に、ダハイ=バクシが兵書の『武經七書』の『三略』と『六韜』をジュシェン語に翻譯し始めて……³⁸⁾。

とあるように、1631年から兵書の翻譯に取り組んだことが分かる。古來、武人のテキストとして用いられてきた『武經七書』は、中國における兵法の代表的古典とされる。七つの兵法書は武科の必須科目であり、武舉と呼ばれる上級武官資格試験の科目とされていた。『孫子』³⁹⁾、『吳子』、『尉繚子』、『六韜』、『三略』、『司馬法』、『李衛公問對』からなる『武經七書』が、1631年からダハイ=バクシによって翻譯され始めたということから、このころホンタイジが兵法に關する書物を重要視していたことが窺える。また、天聰五年 (1631) 正月二十五日の記事に、

(ホンタイジ) ダハイ=バクシが書いた昔の武經を見たところ、武經に言うには、「昔の良將が兵を用いる際に、桶に酒を入れて送ってきたものを河に投げ込ませて、兵士とともに流れを飲んだ。一桶の酒が一河の水に味をつけられようか。兵士はこのことを理解して、死ぬまで盡くそうと思った者は、味が身にしみたという」とあった⁴⁰⁾。

36) 『滿文内國史院檔』(マイクロフィルム) 中國第一歴史檔案館藏；また、河内良弘『中國第一歴史檔案館藏内國史院滿文檔案譯註, 崇徳二・三年分』松香堂書店, 2010, 第500頁參照。

37) 平田昌司 (2009), 第9頁。

38) 『六韜』達海譯, 遼寧圖書館藏。

39) 『孫子』、『吳子』、『司馬法』(武關三子) という三點の滿洲語譯, 蒙古語譯を1710年に完成させている。この滿洲語譯本がさらなる廣がりをもつのは、十八世紀ヨーロッパ『孫子』が紹介されるきっかけを作ったからである (平田昌司 (2009), 第67頁)。

40) 『滿文内國史院檔』(マイクロフィルム) 中國第一歴史檔案館藏。また、(『内國史院檔・天聰五年』I, 天聰五年 (1631) 正月二十五日, 第24-25頁) 參照。また、『大清太宗實錄』ノ

とあるように、酒を河に流して、將軍も士卒に交じって水を飲んだ。わずかな酒で河の流れに味をつけられなくとも、將軍の意氣に感じて全軍が全力で攻めるだろう。ホンタイジはダハイ=バクシによってマンジュ語に譯された『三略』を読んで、將兵の心を掌握することが第一であると説いている。これは武經の『三略』⁴¹⁾に出てくる内容であり、原文の内容とほとんど一緒であることから、ダハイ=バクシは兵書『三略』を正確にマンジュ語に譯していることが分かる。

さらに『三略』を読んだホンタイジが、將士に向かって兵書を引用する事例が頻繁に見られるようになる。例えば前述の天聰五年（1631）正月二十五日の記事を續けて讀むと、この言葉を見てハンが言うには、「昔の例を見れば、兵の長、大臣らは、兵士を慈しめと言っている。私たちのグサantai・エフは戦死した兵士の死體を脚に繩で結わえ付けて引きずってきたが、これでは兵士はどんな氣持ちで死ぬよいか」と言った⁴²⁾。とあるように、兵士の心を掴めるよう努めれば、兵士も必死で戦う。ホンタイジは『三略』を讀みながら、グサantai・エフを褒めていた。つまり、ホンタイジが軍事理論的價值には着目していなかった。

しかし兵法書を讀むことによって、さまざまな事情に對する努力を續ける過程で、武力も必要だと認めていたのである。たとえばホンタイジが次のように論している。天聰五年（1631）八月の記事に、

その日（十三）、ハンは營を出て、ダイリンホ城の日が沈む丘の上に座って、城を見ているときに、ヨト・ベイレは、ハンが營に来てくれたというので酒を用意して酒宴するときに、（中略）、マングルタイ・メイレが腰刀を前に向けて柄をもってひねりまわしていると、デゲレイ・タイジが「汝のふるまいはよろしくないぞ」と拳で殴ると、居丈高に去った。（中略）。彼の侍衛などに向いて劍を抜き、座った椅子から立ち痛罵し、汝らを私が扶養したのは何のためか。彼が私を斬ろうと劍を抜けば、なぜ汝らが劍を抜いて私のところにこないのか。姜太公（jiyang taigung）は「刀を持てば

（順治初纂版）卷六、「取大海榜式，所修武經觀之。其中有云，昔良將之用兵，有饋餼醪者，使投諸河，與士卒同流而飲，夫一餼之醪，不能味一河之水，而三軍之士，思爲致死者，以滋味之及已也。」

41) 『三略』「上略」，「夫將帥者，必與士卒同滋味而共安危，敵乃可加。故兵有全勝，敵有全因。昔者良將之用兵，有饋餼醪者，使投諸河，與士卒同流而飲。夫一餼之醪，不能味一河之水，而三軍之士思爲致死者，以滋味之及已也。」

42) 『滿文內國史院檔』（マイクロフィルム）中國第一歴史檔案館藏。また、『內國史院檔・天聰五年』天聰五年正月二十五日，第25頁）參照。また、『大清太宗實錄』（順治初纂版）天聰五年正月二十五日にも、「上覽至此曰，觀此乃主將欲得士卒之死力也。如我國孤三泰額駙與敵交鋒，士卒有戰死者，尙以繩繫其足曳歸。主將若此誰肯用命。」

割く、斧を持てば斬る」と言っているぞ。彼が劍を持ったのは、私を斬りたいと抜いたぞと怨み言を言って、モンゴルの家に入った（後略）⁴³⁾。

とあるように、ハンが受難すれば、汝らは姜太公 (jiyang taigung) が言ったように「刀をとれば必ず割け、斧をとれば必ず斬れ」とするべきだ、という突発的な事態に備えて、ハンを守る義務を有するとホンタイジが論している。これは『六韜』の「文韜」に窺える内容である。

文王問太公曰、守土奈何。太公曰、無疏其親、無怠其衆、撫其左右、御其四旁。無借人國柄。借人國柄、則失其權。無掘壑而附丘、無舍本而治末。日中必擘、操刀必割、執斧必伐。日中不擘、是謂失時。操刀不割、失利之期。執斧不伐、賊人將來。涓涓不塞、將爲江河。熒熒不救、炎炎奈何。兩葉不去、將用斧柯。是故、人君必從事於富。不富無以爲仁、不施無以合親。疏其親則害、失其衆則敗。無借人利器。借人利器、則爲人所害而不終其世。

このように、領土を守るには、親族を粗略に扱わない。手にしている権限を臣下に貸さない。いったん刀を手にしたら必ず殺すことであり、好機を逃してはいけない。そんなことをすれば、たちまち相手の手にかかって、身を破滅させてしまう。ホンタイジは『六韜』「文韜」の守土篇を仔細に読んでいたことが看取できるだろう。だが、ホンタイジはこれまでの引用にとどまらず、變化する事態に即應して頻繁に引用する事例も見られる。たとえば以下の記録には、

シウリ額駙のグサの一人が臺を攻めるとき、砲に当たって脚が折れた。それをハンが聞いて醫者を遣わして治療させたが、手遅れで治療できず、傷が腐って蛆がわいていると報告があったので、ハンは悲しんで、シウリ額駙や他の官僚たちに向かって言うには、「これを汝らが自ら見舞って治療させるように。汝らができなければ、なぜ早く私に報告しなかったのか。私が治療させるものを、手遅れで治療できないぞ。汝らは何も故事を知らないのか。昔ある良將が出征した先で、桶に酒を盛って送って来たものがあるので、「この酒を飲めばみんなに不足する」と、桶の中の酒を河に投げ込んで、河の流れを兵士と共に飲んだことがある。またある身分の低い兵士に癰ができたのを、吳起將軍が知って吸った。その兵士の母が泣くと、他人が「汝の子は身分の低い兵士であるぞ。將軍が自ら癰を吸うのになぜ泣くのか」と言うと、母は「これの父の癰を吳起將軍が吸ったので、恩に報いるために戦死した。私はこれがまた一體どこで死ぬのかと思って泣くのである」と言ったということである。

43) 『滿文原檔』第七冊、餘字檔、天聰五年八月、第430-431頁（『滿文老檔』V太宗2、第539-542頁）。

汝ら官人はみな故事を知る輩であろう。兵士が負傷すれば治療させよ。病めば見舞いに行け。そうすれば兵士の心中は死を恐れず、汝の前で死のうとするぞ⁴⁴⁾。とあり、ここでも先に引用した『三略』の語句に、さらに戦国時代の魏の將軍吳起の事例を加えて論している。吳起の事例は『韓非子』にも出てくる語句であり⁴⁵⁾、しかも吳起は『武經七書』の『吳子』の作者でもある。こうしたホントイジが策戦そのものを目的とせず、兵法書を意識して読み續けていたことが分かる。

3 『通鑑』から繪本へ

一方、ダハイ=バクシの翻譯未完リストに『通鑑』(*tung giyan*)がありながら、漢人の知識人の王文奎が譯してハンたるホントイジが讀むべきと勧めている。

書房秀才王文奎謹奏、時宜以憑採納其一、謂勤學問以迪○○君心。昔魯哀公問政、而孔子對曰、文武之道具在方冊。又、孟子云、聖如堯舜、不以仁政、不能平治天下、是可見法不師古終行之而有斃者也。臣自入國以來、見上封事者多矣。而無一人勸○○汗勤學問者、臣每嘆源之不清、而欲流之不濁、是何□不務本而務末乎。○○汗雖睿智天成舉動暗與古合、而○○聰明有限、安能事事無差。且○○汗嘗喜閱『三國志傳』、臣謂此一隅之見、偏而不全、其帝王治平之道、微妙者載在『四書』、顯明者詳諸史籍。宜於八固山讀書之筆帖式內、選一二伶俐通文者、更於秀才內選一二老成明察者講解讎寫、日進『四書』兩段、『通鑑』一章。○○汗於聽政之暇、觀覽默會、日知月積、身體力行、作之不止、乃成君子。(後略)⁴⁶⁾。

とあり、これまでハンの愛書として讀まれてきた書物は『三國志傳』であるが、あいにく『三國志傳』は偏りがあって完全なものではない。この時點ですでにダハイ=バクシは翻譯が終わってない『三國志』(*san guwe jy*)があったが、ここで王文奎が言っている「偏而不全」の『三國志傳』は、漢文の『三國志傳』⁴⁷⁾なのかあるいはダハイ=バクシの

44) 『滿文原檔』第七冊、餘字檔、天聰五年八月、第436-439頁(『滿文老檔』V太宗2、第543-544頁)。

45) 『韓非子』「外儲說左上」,「吳起爲魏將而攻中山、軍人有病疽者、吳起跪而自吮其膿、傷者之母立泣、人問曰、將軍於若子如是、尙何爲而泣、對曰、吳起吮其父之創而父死、今是子又將死也。今吾是以泣。」

46) 『奏疏稿』天聰六年九月分。

47) 『三國志傳』については、明末の政界の有名人の湯賓尹が編纂したテキスト『新刻湯學士校正古本按鑑演義全像通俗三國志傳』、萬曆年間の建陽劉龍田喬山堂の刊本『新鍍全像大字通俗演義三國志傳』、萬曆中鄭氏聯輝堂の刊本『新鍍京本校正通俗演義按鑑三國志傳』、明の武林夷白堂の刊本『新鐫通俗演義三國志傳』、明の黎光堂劉榮吾の刊本『鼎峙三國志傳』、

未完了のものなのかははっきりとはわからない。

そうしてこの上奏者の王文奎については、『清史稿』に、

沈文奎，浙江會稽人。少寄育外家王氏，因其姓。年二十，爲明諸生，北游遵化。天聰三年，太宗伐明，下遵化，文奎降。從貝勒豪格以歸，命值文館。漢軍旗制定，隸鑲白旗⁴⁸⁾。

とある。なるほど書房の秀才たる王文奎はそもそも大明の諸生であり、諸生とは童試の中の最初の三つの試験である縣試・府試・院試に合格したものである。彼は天聰三年に投降してのちに文館に知識人として勤めていた。さらに、王文奎はそれぞれ順治六年と順治七年に『大清太宗實録』の編纂、および『三國志』や『大遼史』、『金史』、『大元史』三史の翻譯事業に関わった人物でもある⁴⁹⁾。しかし順治七年に完譯した『三國志』(*ilan gurun i bithe*・三國の書)には、ダハイ=バクシが翻譯を終えてないことに一切觸れないが、改めて翻譯したかもしれないことを考える必要がある⁵⁰⁾。

および萬曆二十年余象斗雙峯堂の刊本『音釋補遺按鑑演義全像批評三國志傳』などのテキストがある。そのうち湯賓尹本の研究については、金文京(2011, 第81-96頁)参照。

48) 『清史稿』卷二百三十九，列傳二十六

49) 『大清世祖實録』卷四十二，第三頁，順治六年正月丁卯，「○纂修太宗文皇帝實録，命大學士范文程、剛林、祁允格、洪承疇、馮銓、甯完我、宋權充總裁官。學士王鐸、查布海、蘇納海、王文奎、將赫德、劉清泰、胡統虞、劉肇國充副總裁官」。また、『大清世祖實録』卷四十八，第二十頁，順治七年四月辛丑，「以翻譯三國志告成。賞大學士范文程、剛林、祁允格、甯完我、洪承疇、馮銓、宋權。學士查布海、蘇納海、王文奎、伊圖、胡理、劉清泰、來袞、馬爾篤、蔣赫德等，鞍馬，銀兩有差」。また、『*dailiyoo gurun i suduri*』(『大遼史』)，『*aisin gurun i suduri*』(『金史』)，『*dai yuwan gurun i suduri*』(『大元史』)(BnF藏)「序文」に，【原文轉寫】「enduringge i ujen hese be gingguleme alifi : dailiyoo gurun i dergi/taidzu ci silioo i yeloi daši i debei jalan de isitala juwan duin/han i ilan tanggū nadan aniya aisin gurun i uyun han i emu tanggū/juwan uyun aniya : dai yuwan gurun i juwan duin han i emu tanggū ninju/juwe aniyai banjiha be : baitangga babe kimcime arame : wesihun erdemunge/sucungga aniya : sunja biya ci arame deribuhe : ilan gurun i bithe be//asaha i bithei da cabuhai, taciha bithesi nengtu, taciha bithesi/yecengge, manju gisun i sume araha : asaha i bithei da hūkio baitakū/babe waliyame ici acabume dasaha : asaha i bithei da wang wen kui/aisilakū lio hūng ioi se nikan bithe be sure de giyangnaha : /bithesi burkai, kengtu, gūwalca, korkodai, šulge se gingguleme/araha : aliha bithei da hife uheri be tuwaha : /wesihun erdemunge i duici aniya ninggun biya de šangnaha : /ijishūn dasan i sucungga aniya ilan biyai orin ninggun de//wesimbuhe」 : uheri tuwaha/dorgi kooli selgiyere yamun i aliha bithei da kicungge, fung ciowan, ning wan o/dorgi narhūn bithei yamun i aliha bithei da fan wen ceng/dorgi gurun i suduri yamun i aliha bithei da garin」とある。

50) 『三國志演義』は中國近世の小説の中でもっとも有名で、おそらくもっとも多種類のテキストが出版された小説である。だがダハイ=バクシが用いた底本は正史の『三國志』なのか、あるいは王文奎が述べているテキストなのか、現段階で斷言することは極めて難しいと言わざるを得ない。一方、ヨーロッパ人が最初にフランス語に翻譯した底本は、漢文の『三國志演義』ではなくマンジュ語『*ilan gurun i bithe*』によって、完譯の (*San-koué-tchy*)

要するにハンたるホントイジが兵書以外に、『三國志傳』も好んで読んでいたことが分かる。それゆえ「帝王治平之道」としては『四書』や『通鑑』があり、これを八旗の中から筆帖式を選び、さらに秀才の中から明察の者を選んで翻譯すれば、日に『四書』を二段、『通鑑』を一章、それぞれの翻譯を進めることができ、ハンが政治を行う間にこれらを閲覽し、日々積み重ね、できるかぎりこれを實行すれば、そのうち「君子」になると言っている。とりわけ、『四書』や『通鑑』の眞剣な讀書を阻害した要因の一つは『三國志傳』である。

一方、大明で『四書』は科擧試験の必須科目なので、必ず勉強しなければいけない。加えて大明の朝廷で用いられた經筵のテキストは、内閣大學士であった張居正が『資治通鑑』と『四書集注』に基づいて書いた『四書直解』と『通鑑直解』という注釋書であり、いずれも雅文漢文で節略し、そのあと古文を平易に順々に白話で解説し、全體の意味を簡單にとくテキストである⁵¹⁾。これにともない王文奎は『四書』と『通鑑』を必讀書として推薦していたと思われる。ちなみに、寧完我也「歴代の興廢を譯すなら『四書』や『通鑑』などが重要である」⁵²⁾と言っていた。このように相次いで推薦された『四書』は、周知の如く南宋の儒學者朱熹が『禮記』中の「大學」、「中庸」二篇を單獨の書物として『論語』、『孟子』と合わせた『四書集注』を總稱したものである。さらに張居正はこれをもって白話で解説を加えて、『四書直解』というテキストの編纂に至った。

ところでホントイジが相次いで推薦したことで、四書五經に關連する内容が讀まれていたことも窺える。『大清太宗實錄』には、

上御翔鳳閣下，集和碩親王、多羅郡王、多羅貝勒等，固山貝子等，固山額眞等，都察院承政新進議事大人等諭曰，（中略）經曰，身修而後家齊，家齊而後國治。爾等若待女子小人以義交，朋友以信，如此身則修矣。孝其親，悌其弟，恩惠其子孫親戚，如此則家治矣。爾等當忠信爲國，忽怠，忽敗事。太公曰，閑居靜處，而誹時俗，此奸人，非吾民也。（中略），孔子曰，恭而無禮則勞，愼而無禮則蕙。財物牲畜，固不可太費，亦不可太吝。所以令爾等養育窮民新人者，蓋先哲有言。賞一人而勸者衆，罰一人而懼者衆，朕蒙天佑，諸國雖平，明國尙在賞罰可不明乎。（後略）⁵³⁾。

とあり、ここに「經」という書物が登場するが、マンジュ語史料によると「聖經・šeng

↓
(*Ilan kouroun-i pithé*) : *Histoire des Trois Royaumes*) である。「滿文三國志」の研究については、岸田文隆 (1997), 早田輝洋 (2008, 第 357-382 頁) 参照。

51) 『千頃堂書目』卷三に、「張居正『四書直解』二十六卷，萬曆元年進呈」とあり，同書卷四に、「張居正『通鑑直解』二十五卷，萬曆初年講筵所編進」とある。

52) 『奏疏稿』天聰七年七月初一日。

53) 『大清太宗實錄』(順治初纂版) 卷二十四，崇德二年四月二十八日，第五十二頁。

ging」のことであって⁵⁴⁾、儒教に関連する書物が指していることは間違いない⁵⁵⁾。それぞれ聖經 (seng ging) や孔子が語る「身を修めた後に、家を齊える。家を齊えた後に、國を治める」と「恭しくて無禮であれば徒勞であり、慎んで無禮であれば畏れる」という文章は、いずれも『四書直解』に出てくる文章である⁵⁶⁾。また「太公」は先述した『六韜』の作者姜太公 (giyang tai gung) であり、引用された内容も『六韜』に窺える⁵⁷⁾。まさにホントイジはたびたび「兵書」を代表として読んでいたし、多くの内容にも通じていた。

さらにハンたるものは『通鑑』を翻譯して讀むべきだと知識人が次々主張した一方で、大明から投降してきた仇震は、經史や通鑑の緊要なところを譯して、ハンたるものにオーダーメイドの「君鑑」を創るよう勧めている。その内容は天聰九年 (1635) 三月二十五日の記事に、

譯書史簡明以便睿覽。古來明聖帝王，莫不勤好書史。汗令好學，將書史盡皆譯寫金國字樣，誠天從聰明，堯舜再見。但人君之學，與衆人之學不同。衆人之學，在章句。人君之學，在精要。古人云，務博不如務約。郎中國宿儒亦皆選精要專用工夫。況國

-
- 54) 『*taidzung genggen šu hūwangdi enduringge tacihian*』(『太宗文皇帝聖訓』) 卷一，二十四頁，【原文轉寫】 *šeng ging* bithede henduhengge. boo be teksileki seci. neneme/beyebe dasambi. beyebe dasara boo be teksilere oci. gurun/dasabumbi sehebi. sowe saišara ubiyara babe olhošoro. yaya/niyalma be tuwara doro be kimcire. fejergi urse de jurgan i /ojoro. gucu gargan de akdun ojoro oci tere beyebe/dasaha kai. ama eme de hiyoošūlara. unggata be kundulere/juse omosi. niyaman hūncihin be tacibure oci tere boo be/teksilehe kai. beyebe dasaha boo be teksilehe bime tonde sijrhūn mujilen be jafafi//gurun i jalin kice. sula heolen mujilen be jafafi. ejen be/ume ufarabure. giyang tai gung ni henduhengge. baibi tehede/gurun i banjire be fakšame gišerengge. musei niyalma waka sehebi.
- 55) 『國朝典故』卷四十八，「天順日錄」，「上曰，然，如鐘鼓司承應無事，亦不觀聽，惟時節奉母后方用此輩承應一日。閑則觀書，或觀射。賢曰，前聖經書惟書經是帝王治天下大經大法，最宜熟看。上曰，書經，四書，朕皆讀遍。賢曰，此時正好玩味，況聖質聰悟，一見便曉，最有益。」
- 56) 張居正等編『彙編經筵進講四書直解』「大學」，「古之欲明明德於天下者，先治其國。欲治其國者，先齊其家。欲齊其家者，先脩其身。欲脩其身者，先正其心。欲正其心者，先誠其意。欲誠其意者，先致其知。致知在格物。物格而後知至，知至而後意誠，意誠而後心正，心正而後身脩，身脩而後家齊，家齊而後國治，國治而後天下平」。また、『彙編經筵進講四書直解』「論語卷四」「泰伯第八」，「子曰，恭而無禮則勞，慎而無禮則戇，勇而無禮則亂，直而無禮則絞。」
- 57) 『六韜』「文韜」「上賢」第九，「四曰，奇其冠帶，偉其衣服，博聞辨辭，虛論高議，以爲容美，窮居靜處，而誹時俗，此姦人也。王者謹勿寵。五曰，讒佞苟得，以求官爵，果敢輕死，以貪祿秩，不圖大事，貪利而動，以高談虛論，說於人主，王者謹勿使。六曰，爲雕文刻鏤，技巧華飾，而傷農事，王者必禁。七曰，僞方異技，巫蠱左道，不祥之言，幻惑良民，王者必止之。故民不盡力，非吾民也。」

君機務其多精神有限，何能傍及煩史。昔唐太宗集古今書史，凡係君道國事者，編爲一冊，名曰君鑑。日夜披覽，成貞觀之盛治，後世法之。今汗宜選漢人通經史者二，三人，金人知字法者三，四人，將各經史，通鑑，擇其精要，有俾君道者，集爲一部。日日講明，則一句可包十句，一章可并十章。此舉約該博執要貫煩之法，工夫極簡明便易。聖心一覽，編知道理在目前。五帝三王不能過也⁵⁸⁾。

とある。ハンたるものはみんなと違って、緊要なところだけ読むべきであり、歴代の唐太宗は古今の書史を集めて一冊の『君鑑』を編纂させた。ハンも漢文と満文に通じる者に「經史」（經書と史書）と『通鑑』の優れたところを編纂させ、日々にハンに進講するべきだと仇震は勧めている。あくまでも、原典を通讀するよりも、最適なところだけ讀むことを優先させたいと考えていた。寧完我と王文奎との主張とはやや異なっている。

ちなみに歴史を爲政者のための鑑とする認識に基づいて編纂し始めたことについて、礪波護は「十一世紀末に、宋の神宗の詔をうけて司馬光が完成させた編年體の『資治通鑑』は、史實の正確無比をもって知られます。当初は『通史』と名づけたのに、神宗から『資治通鑑』という名を賜ったのは、歴代の史實を明らかにして、皇帝が政治を行う際の参考に資することができる、という意味からです。日本の平安時代、歴史文學の代表作『大鏡』やそれにつづく『今鏡』『水鏡』などの〈かがみのも〉とよばれる作品群も、このような觀念の系譜につながります⁵⁹⁾と指摘している。このような影響力は明の萬曆帝の時代にも及んで、内閣大學士であった張居正が『資治通鑑』と『四書集注』に基づいて、入門書『通鑑直解』⁶⁰⁾と『四書直解』⁶¹⁾という注釋書を書き、しかも毎日萬曆帝に侍して講讀を行っていた。

一方、『通鑑』については明に數種の版が出て、たとえば、『通鑑』と『綱目』がある。また、兩書の一文字をそれぞれ採った『綱鑑』がある⁶²⁾。しかし、ダハイ=バクシの翻譯リストにある『通鑑』（tung giyan）や、三人の知識人の寧完我、王文奎、仇震が次々に必讀書として推薦した『通鑑』がいずれを指すのかははっきりとはしない。ところが『北京

58) 『明清檔案存眞選輯』「瀋陽舊檔」，第56頁。また、『奏疏稿』天聰九年三月分二十五日にも收録。

59) 礪波護（2006）『中國歴史研究入門』「序説」「鏡鑑としての歴史」第3頁。

60) 『千頃堂書目』卷四，張居正通鑑直解二十五卷，萬曆初年講筵所編進。

61) 『千頃堂書目』卷三，張居正四書直解二十六卷，萬曆元年進呈。ちなみに、張居正の『四書直解』は、雍正年間に至ると出題する部分を譯する筆記試験が行なわれ、科擧に向きのテキストになっていた（『欽定八旗通志』卷一百一「學校志八」，於貢院內考試に「將『四書直解』內限三百字爲題，繙滿文一篇，其繙譯精通者，聽考官選取之後，將卷冊交送禮部。」とある）。

62) 中砂明德（2012），第370頁。

地区滿文圖書總目』には『*hafu buleku bithe*』（通鑑）「明・王世貞編，達海等譯」⁶³⁾ というダハイ=バクシのマンジュ語譯『通鑑』が掲載されている。王世貞については、嘉靖年間から萬曆年間にかけての文人および政治家である。しかも、通鑑體と綱目體を合體させ、それぞれ綱目・通鑑から一字を取って、『歷朝綱鑑會纂』と名づけられた編年史書を編纂した⁶⁴⁾。ところで、中砂明德は「『綱鑑』が通俗史書として明末に横行し、以後歴史教科書として廣く讀まれた。また、嘉靖以後に「綱鑑」が流行したとするのも正確ではない。萬曆年間以後とすべきだろう」と指摘している⁶⁵⁾。こうした認識にもとづいてダハイ=バクシは『通鑑』(*tung giyan*)のマンジュ語譯に努めたが、全譯はのちのバクシたちが濟ませて『通鑑』(*hafu buleku bithe*)という意譯の書名にかわったと考えられる。

ホントイジはいよいよ『通鑑』に肯定的な評價を下し、それ以外の書物の扱いをやめようとしていた。それに関してホントイジは次のように語っていた、

二十日、ハンは三部の文臣を皆集めて、「私が漢文の書を見ると空虚で虚偽の言が多い。全てを見たということはない。今、大遼、金、宋、大元この四國の政道を勉め治めて國を盛んにした。逆を行って政道を壊した。征討した、勝った、敗れた。賢臣、忠臣が政道を治め盡くした。奸臣が政道を壊した。そのような緊要なところをぴったりと事實にあわせて書いて常に見たい。漢文の『通鑑』以外の他の事例に書いたのは、敵に回数を數えて攻めた。誰がしかけたという言葉はみんな嘘である。そのような書を國に伝えれば、道理を理解しない民が信じる。それを書くことをやめよ」と言った⁶⁶⁾。

とある。大遼、金、宋、大元の政道を鑑として政治も盛んになった⁶⁷⁾。ところが、ここでより重要なのは、『通鑑』以外の書物は皆嘘ばかり書いてあるから、多くの讀者が求めて、これらを読むのを止めさせようとしていた。やはり、王文奎、寧完我、仇震が推薦した通り、『通鑑』を読むことに相當の熱量が注ぎ込まれていたことはたしかである。こうしたことで政治がかなり盛んになっていたことは、順治三年(1646)に譯した『*ming gurun i hūng u han i oyonggo tacihyan*』（明國の洪武ハンの要訓）(マンジュ語)の「序文」に

63) 『全國滿文圖書資料聯合目錄』1991年、第157頁。また『北京地区滿文圖書總目』(2008年第107頁)にも収録されているが、それぞれ『綱鑑會纂』と『通鑑』と題して編纂した。

64) 『綱鑑會纂』三十九卷、大文堂刊本、村本文庫京都大學人文研究所所藏。

65) 中砂明德(2012)、第369-370頁。

66) 『滿文原檔』第九冊、滿附三、天聰九年五月二十日、第190-191頁(『舊滿洲檔・天聰九年』、第144-145頁)。

67) この史料について烏蘭巴根(2010、第300頁)は、「天聰汗原來只想翻譯金史、這次卻要求翻譯遼、宋、金、元四史」と誤解をしている。

ふれられている。

我々の太祖、太宗の威徳が教えられて、基礎を築いて禮を廣めた。政治を治して、國を守るという方向は、昔からの帝王の法度に大きく一致している。しかしながら、ハンは唐宋の歴史、遼、金、元の事例の得失を勤勉に読み、講讀し、鑑みないことはなかった（後略⁶⁸）。

とある。初期の太祖から太宗にわたって中國歷代によく似た政治が行われていた。そしてダイチン・グルン三代目のハンの順治帝は、太祖と太宗時代の政治的價値を認めながら、自らも漢籍に親しんで讀むように努めていた⁶⁹。だが、太祖のヌルハチ時代においては漢籍の影響が政治的な面だけでなく、さらに明版の繪本における年畫にも及ぶようになる。

除夜に家の梁に貼られる紙を描く時、この梁に貼られる紙に、騎射した敵を攻める姿は決して描くな。むかしの優れた事例、ハンは、大臣が行った得失の處を描くと云った後に、畫匠などが書房の大臣などのもとに来て云った言を告げた。文官の大臣等ダイハイが先に出て議し、『帝鑑圖』というハンの鑑の圖の書を探して、それぞれ二尋の五枚紙に有益なよい場面を描いて貼り附けた。ハンは見ると、分からないと繪の下に文字を書けとジュシン文字が書かせた⁷⁰。

毎年の中國のにぎやかな舊正月（春節）をいろどるさまざまな小道具の中でも、年畫はひとときわ華やかなものである。年畫の起源であり、またもっともオーソドックスな題材でもある門神圖は、ふつう秦叔寶と尉遲恭の二人の武將を描いたものである。歴史上實在の人物でありながら、神としてみえられていたことが端的にあらわれている⁷¹。また門神として登場する人物は、それぞれ周の武王を助けて紂を討った姜太公、身を捨てて秦王を刺した荊軻などが出てくる。いずれも魔除けとして、大晦日から貼り附けられ新

68) 『*ming gurun i hūng u han i oyonggo tacihyan*』（明國の洪武ハンの要訓）BnF 藏。明の太祖洪武帝の語録をまとめた『明太祖實訓』のマンジュ語譯本である。漢文の「實訓」をマンジュ語で「oyonggo」（緊要）、「tacihyan」（教え、教訓）との意味で書名を意譯していたことがうかがえる。このテキストの研究については、渡邊純成（2013）参照。

69) 實際に三代目のハンの順治帝は漢文を學び始めたのは順治二年からのことであると考えられる。たとえば、『大清世祖實錄』卷十五、第5-6頁。「順治二年三月、乙未、大學士馮銓、洪承疇等奏言、上古帝王、奠安天下。必以修德勤學爲首務。故金世宗、元世祖、皆博綜典籍、勤於文學、至今猶稱頌不衰。皇上承太祖、太宗之大統、聰明天縱、前代未有。今滿書俱已熟習、但帝王修身治人之道、盡備於六經。一日之間、萬幾待理、必習漢文、曉漢語、始上意得達而下情易通。伏祈擇滿漢詞臣、朝夕進講、則聖德日進、而治化益光矣。」

70) 中國第一歷史檔案館所藏「滿文國史院檔」松村潤（2001）『清太祖實錄の研究』東北アジア文獻研究叢刊2、第86頁。

71) 金文京（1998）「年畫のなかのヒーローたち——年畫と芝居・物語」第35-40頁。

しい年を迎えるのは昔から中國の習慣である。

こうした漢人の地域で最も普及している年畫はまさに新年の象徴であり、除夜から描いて貼り付けられるのと同様に、ダイチン・グルン初期にもとりあげられ、かつ世俗的な「吉祥」をテーマとして描くことにさらに工夫を凝らしていた。その参考書とした『帝鑑圖』とは『帝鑑圖説』⁷²⁾ という書物であり、やはり書房のリーダであるダハイ=バクシは畫匠をつれて描かせた。『帝鑑圖説』は礪波護の解説によると、

明の政治家、張居正と呂調陽の共著した圖説中國史と稱すべき書物である。八十一事はもとに善にして模範とすべき故事と、三十六事はいずれも悪にして戒めとすべき故事を選んでいます。八十一と三十六という數字、善事は陽であり吉であるから陽數の九の九倍、悪事は陰であり凶であるから陰數の六の六倍、という事例を歴史故事から選擇したのである⁷³⁾。

とある。張居正は『通鑑直解』と『四書直解』という注釋書以外に、『帝鑑圖説』の作者でもある。『通鑑』の最大の意義は、やはり一つのタイトルのもとに中國通史を實現し、それに普及力を持たせたことで、『帝鑑圖説』は繪入りかつ口語體で書かれた中國通史の繪本となった。ところで、アイシン・グルンにおいて、畫匠が繪本を創作していたことも窺える。

是日、張儉、張應魁恭畫「太祖實錄圖」成、上稱善。賞張儉人一雙、牛一隻。張應魁人一雙⁷⁴⁾。

アイシン・グルン初の繪本「太祖實錄圖」が登場するが⁷⁵⁾、天聰九年（1635）に畫匠の張儉と張應魁によって完成された。このような漢人の畫匠が職人として勤めるきっかけになったのは、太祖であるヌルハチがつとに關心を持っていた經緯からである⁷⁶⁾。そもそも匠人は極めて重要な存在であり、ダイチン・グルンにおいて畫匠が乏しいことはなかった。それは書物の印刷に關わる刻字匠（kesejan）や造紙匠も同様であった⁷⁷⁾。いず

72) 『全國滿文圖書資料聯合目錄』（第11頁）、また『北京地區滿文圖書總目』（第153頁）によると、故宮博物館圖書館に順治年間のマンジュ語譯の寫本『帝鑑圖説』が所藏される。

73) 礪波護（2006）『中國歴史研究入門』「序説」「鏡鑑としての歴史」第3頁。

74) 『大清太宗實錄』（順治初纂版）卷二十、天聰九年八月八日、第14頁。

75) 「清太祖實錄」の研究については、今西春秋（1935、1960）、三田村泰助（1957、1959）参照。のち、『清朝前史の研究』（東洋史研究會、1965）所收。實はこの「太祖實錄圖」は、乾隆年間に刊行された『滿洲實錄』と深く關連している（松村潤（2001）参照）。

76) 前掲注13参照。

77) 『滿文原檔』第七冊、月字檔、天聰四年二月八日、第50頁（『滿文老檔』IV太宗1、第313-314頁）。初八日に、灤州に送った書、灤州の者を速く催促して田を耕させよ。官に任じる者を今送る。またこの頭の刺ることについての書を刻字匠（kesejan）に彫らせて、いづれの地で頭を刺らなかつた者を得た時は、頭を刺りこの書を待たせて行かせよ。また汝

れにせよ、繪本『帝鑑圖説』との結びつきとして登場する年畫からはじめ、「太祖實錄圖」までの完成に役割を果たしたのは、やはりこれらの匠人である。

おわりに

吉川幸次郎は「元の君主、始祖のジンギスカンはもとより、比較的漢族の文化を尊重したフビライも中國語を話さず、中國文を読み得ず。清朝の諸帝は異なって、入關以前は、もとよりその能力を十分にしなかったであろうが、入關後最初の君主である順治帝が、代作ではあろうけれども、すでに「孝経」の注を書いている」と指摘した⁷⁸⁾。だが、本論において、ハンたるヌルハチからホンタイジまで、漢文化に対する造詣を窺うに足るところをおおまかに論じた。それでヌルハチが独特な読みかたをしたのは、そもそも漢籍に由来する故事を多く用いていた。なかには「白話小説」のものも含まれたが、原典に忠實で厳密で翻譯することよりも、通讀できることが優先された。

さらに、ホンタイジの時代に下ると、作戦そのものを目的とせずに『六韜』や『三略』を読み、かなりの兵法の知識が蓄えられていた。また、政治の参考に資することを目的とする編年體の歴史書である『通鑑』、および儒教の原典たる『四書』などの内容にも多く通じて、しかも、讀むことに相當の熱量が注ぎ込まれたことで政治がかなり盛んになった。その政治的價値を三代目のハンたる順治帝は認めながら、自らも漢文化に親しんでいた。

だが、初期において漢文化を語るだけではなく、漢人の地域で最も普及する年畫はまさに新年の象徴で、除夜から描いて貼り附けることと同様に、マンジュ人にもとりあげられて、『帝鑑圖説』を参考書として、かつ「吉祥」をテーマとして描かよう工夫を凝らしていた。そして、繪本の『帝鑑圖説』との結びついて登場し、太宗時代に編纂が始まった「太祖實錄圖」に役割を果たしたのは畫匠などの匠人である。こうした、繪本などの書物の編纂が始まったことは、新しい時代の到來を意味しているだろう。

らのそこの芝居役者を悉く送れ、汝らの得た家畜を四旗に分けて保管せよ、財貨はここに送って來い。また、『各項稿簿』天聰四年八月、「敕諭永平遷濼等處軍民人等、知悉爾眾中有能造紙匠役、速赴書房報名、另行優養。特諭。」

78) 吉川幸次郎 (1995) 『吉川幸次郎遺稿集』第一卷、第407頁。

参考文献 (五十音順)

【論著】

- 井黒忍 (2004) 「滿譯正史の基礎的検討 ——『滿文金史 (*aisin gurun i suduri bithe*)』の事例をもとに」『滿族史研究』3
- 稻葉岩吉 (1914) 『清朝全史』(上) 早稻田大學出版部
- 今西春秋 (1935) 「清三朝實録の編纂」(上)(下), 『史林』第20卷, 第3, 4號
- (1967) 「滿文武皇帝實録の原典」『東方學紀要』2
- (1973a) 「後金徽明萬曆皇帝文」について『朝鮮學報』第67輯
- (1973b) *Über einen Anruf der Spätaren Chinan die Ming von ca. 1623, ORIENS EXTREMUS*, 20.1, wiesbaden.
- (1974) 「清太祖實録纂修考」『對校清太祖實録』國書刊行會
- 烏蘭巴根 (2010) 「清初遼金元三史滿蒙翻譯史考述」『西域歷史語言研究集刊』第四輯,
- 額爾登泰, 烏雲達賚, 阿薩圖 (1980) 『『蒙古秘史』詞彙選釋』, 內蒙古人民出版社
- 小澤重男 (1985) 『元朝秘史全釋』風間書房
- 大塚秀高 (1994) 「嘉靖定本から萬曆新本へ —— 熊大木と英烈・忠義を端緒として ——」『東洋文化研究所紀要』124
- (2000) 「天書と泰山 ——『宣和遺事』よりみる『水滸傳』成立の謎 ——」『東洋文化研究所紀要』140
- 岡田英弘 (1994) 「清初の滿洲文化におけるモンゴル要素」『清代史論叢: 松村潤先生古稀記念』汲古書院
- 神谷衡平 (1958) 「大宋宣和遺事」平凡社
- 岸田文隆 (1997) 『『三譯總解』の滿文にあらわれた特殊語形の來源』東京外國語大學アジア・アフリカ言語文化研究所
- 喬治忠 (1992) 「後金徽明萬曆皇帝文考析」『清史研究』3
- 金文京 (1998) 「年畫のなかのヒーローたち —— 年畫と芝居・物語」『月刊しにか』2
- (2011) 「明代『三國志演義』テキストの特徴 —— 中國國家圖書館藏二種の湯賓尹本『三國志傳』を例として」『東アジア書誌學への招待』第二卷, 東方書店
- 斯達里 (2003) 「從『舊滿洲檔』和新發見的史料看滿文史料對清史研究的重要意義」『清史論集慶賀王鐘翰教授九十華誕』紫禁城出版社
- 蕭一山 (1927) 『清代通史』(上), 商務印書館
- 莊聲 (2013) 「マンジュ人の讀書生活について —— 漢文化の受容を中心に ——」(上)『歴史文化社會論講座紀要』第10號, 京都大學大學院人間・環境學研究科
- 陳捷先 (1995) 「努爾哈齊『三國演義』」『滿族史研究通信』第5期
- 礪波護 (2006) 『中國歷史研究入門』名古屋大學出版會
- 中砂明德 (2012) 『中國近世の福建人, 士大夫と出版人』, 名古屋大學出版會
- 早田輝洋 (2008) 「滿文三國志について」『狩野直禎先生傘壽記念三國志論集』汲古書院
- 平田昌司 (2009) 『『孫子』解答のない兵法』書物誕生あたらしい古典入門書, 岩波書店
- 龐曉梅 (2003) 「滿漢文『努爾哈赤徽明書』何種文字稿在先」『清史論集慶賀王鐘翰教授九十華誕』
- 龐曉梅, 斯達理 (2000) 「最重要科學發見之一, 老滿文寫的『後金徽明萬曆皇帝文』」『滿學研究』第六輯, 民族出版社
- 松村潤 (1969) 「崇徳の改元と大清の國號について」『鎌田博士還曆記念歴史學論叢』

- (2001)『清太祖實録の研究』東北アジア文獻研究叢刊2, 東北アジア文獻研究會
三田村泰助 (1957)「近獲の滿文清太祖實録について」『立命館文學』141
(1959)「清太祖實録の編修」『東方學』19
吉川幸次郎 (1995)『吉川幸次郎遺稿集』第一卷, 筑摩書房
李勤璞 (2003)「天聰九年皇太極談話中の「元壇寶藏」」『漢學研究』21-2
李光濤 (1947)「清太宗與三國演義」『中央研究院歷史語言研究所集刊』12
李福清 (Борис Львович Рифтин) (1982)「中國章回小説與話本的蒙文譯本」『文獻』第4期
魯迅「中國小説史略」『魯迅全集』第九卷, 人民文學出版社, 2005年
渡邊純成 (2013)『滿文洪武要訓 *hūng u-i oyonggo tacihyan*』滿洲語思想・科學文獻研究資料5, 科學研究補助金基盤研究 (C) (平成23-25年度)
Tatiana A. Pang, Giovanni Stary, *Manchu versus Ming: Qing Taizu Nurhaci's "Proclamation" to the Ming dynasty*. Harrassowitz Wiesbaden 2010

【滿文・滿漢合璧】

- 『*aisin gurun i suduri*』(『金史』) BnF藏, Mandchou 134
『*ilan gurun i bithe*』(『三國志』) BnF藏, Mandchou 121
『清文總彙』文馨出版社, 1973年
『*taidzu horonggo enduringge hūwangdi yargiyan kooli*』(『太祖武皇帝實録』), 臺北國家圖書館殘卷藏
『*daicing gurun i taidzu horonggo enduringge hūwangdi i yargiyan kooli*』(『大清國太祖武皇帝實録』), 『東方學紀要』2, 1967年
『*taidzung genggen šu hūwangdi enduringge tacihyan*』(『太宗文皇帝聖訓』), 東洋文庫藏
『*dai yuwan gurun i suduri*』(『大元史』) BnF藏, Mandchou 135
『*dailiyou gurun i suduri*』(『大遼史』) BnF藏, Mandchou 133
『滿文內國史院檔』(マイクロフィルム) 中國第一歷史檔案館藏
『滿洲實録』康徳年刊影印, 大滿洲帝國國務院
『滿文原檔』1-10, 臺北國立故宮博物院影印出版, 2005年
『明清檔案存眞選輯』李光濤編, 三集, 中央研究院歷史語言研究所, 1975年
『*ming gurun i hūng u han oyonggo tacihyan*』(明洪武ハン要訓) BnF藏, Mandchou 28
『*ninggun too*』達海譯, 滿漢合璧, 遼寧省圖書館藏
Tatiana A. Pang, Giovanni Stary, *New light on Manchu historiography and literature: the discovery of three documents in old Manchu script*. Harrassowitz Verlag · Wiesbaden, 1998

【漢文・日本語等】

- 『英烈傳』上海四聯出版社, 1955年
『漢書』班固撰, 中華書局, 1964年
『韓非子』二十卷, (元)何荊注, 臺灣商務印書館, 用文淵閣本景印
『各項稿簿』京都大學人文科學研究所藏, 1905年
『舊滿洲檔・天聰九年』(1972, 1975) 1-2冊, 東洋文庫清代史研究室
『金史』(元)脫脫等, 臺灣商務印書館, 1937年
『欽定八旗通志』全11冊, 吉林文史出版社, 2002年
『綱鑑會纂』大文堂刊本, 村本文庫 京都大學人文研究所所藏
『國語』21卷, 京都大學附屬圖書館藏

- 『國朝典故』(明)鄧士龍,北京大學出版社,1993年
- 『奏疏稿』,京都大學人文科學研究所藏,1905年
- 『三略』解放軍出版社,1988年
- 『彙鑄經筵進講四書直解』(明)張居正等編,早稻田大學圖書館藏
- 『史記』司馬遷撰,中華書局,1959年
- 『四書集注直解』(宋)朱熹集注,(明)張居正直解,滿日文化協會,1937年
- 『七修類稿』(明)郎瑛,中華書局,1959年
- 『清史稿』中華書局,1976年
- 『清太祖武皇帝努兒哈奇實錄』北平故宮博物院印行,1932年
- 『春秋五霸七雄列國志傳』(明)余邵魚,上,下,上海古籍出版社,1992年
- 『新鐫陳眉公先生批評春秋列國志傳』第一卷「中國歷史小說選集2」ゆまに書房,1983年
- 『清入關前史料選輯』(一),中國人民大學出版社,1984年
- 『說文解字注』(清)段玉裁,藝文印書館,2007年
- 『千頃堂書目』(清)黃虞稷,上海古籍出版社,1990年
- 『全國滿文圖書資料聯合目錄』書目文獻出版社,1991年
- 『宋史』脫脫等撰,中華書局,1977年
- 『宋書』沈約撰,中華書局,1974年
- 『大宋宣和遺事』國學基本叢書244,臺灣商務印書館,1968年
- 『大宋宣和遺事』神谷衡平譯,中國古典文學全集第七卷,1958年
- 『大清太宗實錄』(順治初纂版),臺北國立故宮博物院藏
- 『大清世祖實錄』新文豐出版公司印行,1978年
- 『太祖武皇帝實錄』『對校清太祖實錄』今西春秋編、國書刊行會,1974年
- 『中國第一歷史檔案館藏內國史院滿文檔案譯注·崇德二·三年分』,河內良弘譯注,松香堂書店,2010年
- 『忠經』馬融撰,涵芬樓,1925年
- 『內國史院檔·天聰五年』I,東北アジア研究班編,東洋文庫,2011年
- 『北京地區滿文圖書總目』北京市民族古籍整理出版規劃小組辦公室滿文編輯部編,遼寧民族出版社,2008年,
- 『北京圖書館善本書目』中華書局,1959年
- 『蒙古秘史』校勘本,內蒙古人民出版社,1980年
- 『滿文老檔』(1955,1956,1958)太祖1-3,滿文老檔研究會譯注,東洋文庫
- 『滿文老檔』(1959,1961,1962,1963)太宗1-4,滿文老檔研究會譯注,東洋文庫
- 『六韜』中華書局,1991年
- Théodore Pavie, *San-koué-tchy Iian kouroun-i pithé : Histoire des Trois Royaumes*, Paris : B. Duprat, 1845-1851
- V. V. Радлов, *словаря тюркскихъ нарѣчій IV*, Санктпетербург, 1905.

Manchu People who Narrate Chinese Culture in the 17th Century

Sheng ZHUANG

Beginning from the Nurhaci era of Aisin Gurun 金國, Manchu people frequently used their own language to tell stories from the Chinese classics. In doing so they used several unique methods to narrate these Chinese tales, among which were included popular novels in the vernacular. Their priority was to make these stories easy to understand, not necessarily to produce strict translations.

By the Hongtaiji era of Taizong 太宗, we can detect that the Manchus had acquired a considerable knowledge of Chinese military classics. However texts such as the *Liutao* 六韜 and *Sanlue* 三略 were read not out of military necessity, but for the purpose of general edification. The Manchus had also by this time also become very familiar with historical works such as the *Tong jian* 通鑑 and the Confucian classics (namely *Sishu* 四書), and the flourishing practice of reading such Chinese books ended up having a great influence on both politics and military practice.

However the Manchus did not merely tell stories drawn from Chinese culture. For example among Han Chinese, when welcoming the new year, what most represented the new year was the *Nian hua* 年畫 (a small poster or banner on which is painted various symbols of prosperity and good luck). Using the *Di Jian Tu Shuo* 帝鑒圖說 as reference book, and employing Han Chinese artisans, the Manchus made their own *Nian hua*. Furthermore when compiling the *Tai zu Shi lu* 太祖實錄圖 (an illustrated record of the reign of emperor Taizu), Han Chinese artists were also much employed.